

あぱっさ

vol. 17

アウラ語ど
地の精霊

HOW TO HELP

特定非営利活動法人
熱帯森林保護団体
Rainforest Foundation Japan
〒154-0012 東京都世田谷区駒沢1-8-20
TEL : 03-5481-1912 FAX : 03-5481-1913
xingu@rainforestjp.com www.rainforestjp.com

＜年会費＞大人：¥5,000 18歳未満：¥3,000
・郵便振替 00140-3-144187 熱帯森林保護団体
・三井住友銀行 東京中央支店
(普)7066247 熱帯森林保護団体
* 銀行からお振込の方は、
お名前とご連絡先を別途必ず当団体までお知らせください。

アマゾン
が
燃えている



9月中旬、アマゾン視察30回目という節目にふさわしい充実した支援の時間を過ごし帰国しました。支援対象地域シン
グー川上流域のイアラピチ族ピラクマの葬儀クアルピに招待されたところから始まりましたが、ピラクマの突然死はシン
グー地域にとってもダメージが大きく、それは彼が熱帯林保護とインディオ存続に多大なる功績を残した事にあります。
個人的にも親しかったのでとても残念です。「イアラピチ語を話せる人間が4人しかいない、言葉は文化だ」と語っていた
ことを思い出します。

養蜂事業は蜂蜜の生産量もアップして、次のステップとして市場、流通の確保を実現しインディオの経済的自立に繋
がるよう模索していきます。集落内では貨幣制度は完全には確立していませんが、もう貨幣導入は時間の問題で、イン
ディオ社会が大きく変化することは間違いありません。少なくとも物質文明に暮らす私たちのように、貧富の格差が起ら
ないように願うばかりです。

今一番深刻な問題として考えなければいけない事として、ジャングルの火災がありました。乾期の最後だったこともあり、
様々な出火の原因で信じられないくらいの大火になっています。夜中、滞在していたカマユラの集落のすぐそばま
で、まるで油に火を注いだかのように带状で赤い火が走り、煙たく咳き込み危機感を感じました。長老ラオーニやメガロ
ンからの強い要望に応え、カヤボ族、ジュルーナ族の若者が中心となり専門家の下、消防隊を結成し消火訓練を実施
しましたが、その訓練中でも火災が発生すると、重たい機材を背負い、時には陸路で、時にはボートを使い水路で現場
に直行する若者たちに同行しました。大火になる前に火元に走り、名も無いインディオたちが、命がけで消火にあたる
姿は、森を火から守る戦士に映り感動しました。私たちは自然の一部です。遠いアマゾンの現状は私たちの問題でもあ
ります。酸素供給源であるアマゾンの森が消滅しないように、これからもインディオの人々、森の神々、精霊さんと共に覚
悟を決めて森が残るように精進して参ります。

(南 研子)



↑ 船で火災現場へ
駆けつける消防隊員



↑ 支援した消火用の水タンク



↑ 消火訓練講習



↑ 左から) 消防事業責任者 軍消防署中佐 マリアーノ
南 研子
カヤボ族リーダーのメガロンとベジャイ



世界でも類のないアマゾン産蜂蜜。



ジャングルから持参しましたので是非お試しください！

- お名前・ご住所・電話番号・ご注文数 をご記入の上、
以下の連絡先へお申込みください。
- 売り切れ次第、販売を終了します。

メール：xingu@rainforestjp.com
FAX：03-5481-1913



熊本のナチュラルコーヒー支援金は、1,034,200円となりました！

皆さまの温かいご支援・ご協力ありがとうございました！

初めまして、ナチュラルコーヒー代表の清田と申します。この度の多くの方からの寄付、本当にありがとうございました。
私たちは、2016年4月14日と16日の2度にわたる大地震により、店舗が崩壊するなど、今思えば大変悲惨な状況の中にい
ました。ただ、地震直後から数ヶ月間は、大変だと思いより、コーヒー屋として、豆を焙煎してお客様に届けようという思いが
強く、その一心でやってきた様に思えます。やがて熊本地震から半年が経ちます。振り返るとあつという間の半年でしたが、と
ても遠い昔の出来事の様に感じることもあります。そして、今、地震の体験が過去の話になりつつある感覚も正直あります。そん
な中、阿蘇や益城町や西原村など震源に近い地域は、壊滅的な状態で復興までには、まだまだ長い道のりが待っています。
体験しないと感ずることができない、悲しい現実の中で暮らしている方々もまだ大勢います。そんな熊本の地で、お互い励ましあ
い、県外からも多くの方の励ましを頂き、それをエネルギーに変え未来を想像できるという機会を頂いたと思い、一歩づつ歩ん
でいると思っています。多くの方々からの励ましや支援によって、混乱の中で生じた不安を、夢や希望に変える、幸せな機会を
頂いたと実感しています。

これを励みに、さらに頑張りたいと思っています。今後とも、RFJとナチュラルコーヒーを宜しくお願い申し上げます。



南研子代表の支援事業視察の旅(8月～9月)に、昨年同様、外部協力者として同行しました。
今年は、ふたつの主要事業で研修会を実施。ブラジル側との打ち合わせ等、事業コーディネータ兼通訳者として渡航前から準備にかかわってただけに、思い入れもひとしおでした。それぞれの事業の現状と今後の展望について、ご報告します。

【養蜂事業】 自立をめざして、初の7民族合同養蜂技術研修会を開催

養蜂事業は、シンゲー河中流域で暮らす7民族(カミュラ、ワウラ、イアラピチ、マチプ、アウエチ、カラパロ、ナフクワ)の各村で実施しています。ブラジル人養蜂技術専門家ウェメルソンが年に数回現地に入り村々をめぐる技術指導を重ねてきました。今回、7民族の養蜂士がはじめて一堂に会して、カミュラ族の村で4日間の技術研修会を実施。これまでの支援により、すべての村の養蜂士グループが基本的な養蜂技術を修得済みであることを踏まえて、初の合同研修会では「自立」という次のステップを見すえた新たな取り組みに力を入れました。

■ 新たな取り組み ～ 養蜂資材の自給自足に向けて

養蜂では、さまざまな資材を使用します。今回の研修では、なかでも定期的に交換が必要なミツロウ製シートの自作に取り組みました。根気とコツがいる作業ですが、ウェメルソンが手本を示すのをじっと観察していた養蜂士が、より簡単な方法を独自にくふうして提案するなど、活気ある実習となりました。

市販の養蜂資材は価格が高いのが難点です。遠いアマゾンまでは輸送費もかさみます。今後はシートをはじめ、木枠、木製巣箱などの定期的に補充・交換が必要な資材を、各村の養蜂グループで自作していくことを目指します。また、余剰のミツロウを活用したロウソクなどの商品開発にも取り組んでいきます。

■ 針を持たない原生バチの捕獲・飼育の試み

当事業では、野生のミツバチの群れを森で捕獲して飼育しています。しかし、この種類のハチは気性が荒く針で攻撃してくるため、養蜂士は防護服の着用が欠かせません。気温40度以上になるアマゾンでは、耐え難いほど暑く、つらい作業となります。いっぽうアマゾンには針を持たない種類のミツバチも数種棲息していますが、体が小さくて集めるミツの量が少なく、また既存の飼育方法に順応しないという難点がありました。

今年5月、ウェメルソンを全国養蜂者大会に派遣し、これらのハチの最新の飼育技術を学んで来てもらいました。そして研修会では、2種類の針無し原生バチの群れを森で捕獲して飼育する実習を行いました。針無しバチは採れるミツの量は少なくとも、より希少価値があり、高く売れることが期待されます。なにより養蜂士の作業の安全と簡便化がはかれます。今後、従来のハチに加えて、これら針無しバチの養蜂にも取り組んでいく計画です。

■ 主体的・自立的な運営と経済的持続可能な仕組みづくりをめざす

当事業の最終目標は、養蜂士たちが意欲を持って主体的・自立的に養蜂業を運営していくことです。そのためには、それができるひとづくり(エンパワーメント)と、経済的に自立し持続していける仕組みづくりが求められます。

彼らの伝統文化は文字を持たないため、読み書きや計算が不得手な養蜂士も少なくありません。研修会では、作業記録や生産記録の取り方、売上げの中から経費用の資金をどう積み立てていけばよいか、などの運営面の勉強会も行いました。なかには、このような運営面ですでに秀でているグループもあり、彼らが披露してくれた経験談は他のグループへのよい刺激となったようです。

経済的な持続性を確立するには、商品開発や市場の開拓が必要です。また一般市場に流通させるには、ブラジルの法基準を満たせる加工設備(ハチミツをしぼってビン詰めする作業場)の整備も必要となります。意欲に秀でたグループとともに手本となるモデルケースをまずは構築して、他のグループの目指す目標としていく計画です。



【消防団事業】 乾燥化が進み火災が多発するアマゾンの森を焼失から守る若者たち

消防団事業では、シンゲー河中流域に暮らすカヤボ族とジュルーナ族の若者たちが村ごとに消防団を組織して、森林火災の防止と消火にあたっています。昨年、カヤボ族長老メガロンと、この地域に長年ボランティアで通い続けてきたマツグロツ州消防職員マリアーノからの緊急支援要請を受けて、本事業が開始しました。

今回、各村から消防団員がピアラス村に集合して2週間の技能研修を実施。乾季(4月～9月)の終盤という最も乾いた時期に、気温40度以上、湿度10%以下の日が続き、熱風が土ぼこりを舞い上げていました。はからずも研修会は、次々と発生する火災を鎮火して歩く実戦の場となり、アマゾンが直面する深刻な危機を実感させられたのでした。

■ 燃えるアマゾンの森 — この乾季だけでシンゲー・インディオ国立公園の15%が焼失

シンゲー河流域を含むアマゾン南部は、いま、ひどく乾燥化が進んでいます。空から見た森は、あちこちで煙をあげていました。大規模な火災場所では、火の長い帯がなめるように森の上を進みながら、森を喰らい尽くしていました。中でも上流域の先住民保護区「シンゲー・インディオ国立公園」は状況がひどく、8月に始まった火災は1ヶ月以上も燃え続け、公園面積(本州とほぼ同じ)の15%(※)の森が焼失したとのことです。 ※15% = 近畿地方(7府県)に匹敵

シンゲー河流域の保護区群は、その境界線ぎりぎりまで周囲の農業開発が進み、まるで緑の孤島のような状態です。保護区を取り囲む大牧場・大農場は1軒あたりの面積が数千から数万ヘクタールにおよび、木一本ない農地は乾季には乾いた熱風を保護区の森へと吹き込みます。また乾燥化は雨季の雨不足をもたらし、雨不足がさらに乾季の乾燥化に拍車をかけています。アマゾン南部の土壌は砂質なので、もしこのまま森を失えば、一帯は文字通り砂漠となってしまうでしょう。

■ 消火、火災予防、不法侵入の監視に力を入れる

森林火災の原因は、さまざまです。たとえば、保護区の森を横断する州道进行大型長距離トラックからのタバコのポイ捨て。トラック運転手が道沿いの森で野宿する際の火の不始末。また、ポイ捨てしたビンや缶が強烈な太陽光を反射して乾燥しきった草や落ち葉を発火させるという危険もあります。木材不法伐採業者や金などの不法採掘人、密漁・密猟者等の、不法侵入者たちの火の不始末の問題も深刻です。

研修中、消防団員は、州道沿いから発生した火を追って消火しながら森の中を20キロ歩いた日もありました。州道沿いでのごみ拾いや、トラックが集まる場所に「ゴミ捨て厳禁」の看板を作って立てる活動も行いました。また不法侵入の防止のため、ボートやバイクを使った保護区境界線のパトロールも年間を通して行っています。



■ 開発が引き起こす乾燥化によって、伝統的な焼畑が火災発生リスクに

火災の原因として、もうひとつ、これまでは何の支障もなく行えていた先住民の伝統的な焼畑が、いまでは大きなリスクになってしまった、という問題があげられます。以前は、乾季末期でも森の中は適度に湿り、焼畑の火は燃え広がらずに自然に鎮火していました。しかし、地面に降り積もった落ち葉が手で握ればカリカリと音を立てて粉々になるほど乾燥化が進むいまは、まったく状況が違います。

研修中、村人から「焼畑の火が周囲の森に広がってしまった」という報告が何度も届き、そのたびに消防団が現場に出動しました。消火活動に同行し、乾いた落ち葉をくすぶらせながら周囲の森の四方八方へ、じりじりと幾筋もの火の道が進んでいくさまを目の当たりにして、恐怖と強烈な危機感を肌身で感じたのでした。

乾燥化が進むいまは、焼畑の火を入れる際に特別な対処方法をとらなければなりません。それは、あらかじめ周囲の枝や落ち葉などの可燃物をすべて取り除いて、幅5メートルほどの緩衝帯を設けるというものです。消防団員たちは、森林火災を起こさない焼畑の方法を実際にして見せながら村人たちに伝授する、という啓発普及活動にも取り組みました。

■ 「森を守れるのは先住民消防団だけ」の使命感と誇りを胸に

消防団の消火方法は、スコップで土をかける、大きなゴムべらのような道具ではたいて酸素を遮断する、背負った水のうから水鉄砲方式で水をかける、といった素朴で体力頼りの方法です。しかし、保護区周辺の大農場地帯のまちには消防署すらまだないような地域環境で、ましてや森の中を迷わずに縦横無尽に歩いて火を消すことができるのは、先住民の彼らだけです。消防団が活躍するシンゲー河中流域では、この2年間、上流域のような大規模な火災は起こっていないことから、彼らの存在の重要性が見て取れるでしょう。

「開発のせいで乾燥が進み、そのせいで森が燃えている。それなのに森を奪った側の者たちが『森林火災は焼畑をするインディオのせいだ』などと言っている。そんな責任転嫁のせりふは誰にも言わせない。森を守れるのは私たちだけだ」

長老メガロンの言葉に、消防団員たちは真剣に聞き入っていました。

若者たちの意欲はとても高いです。「いつまでも支援に頼りたくない」と、「森でアマゾン固有種の木々の種を集めて苗木を育てて、周辺の自治体の森林再生プログラムにそれを売って活動資金を作る。そんなプロジェクトに取り組みたい」という提案も彼らの中から出ていました。新たな世代の誕生をうれしく感じつつ、若者たちのがんばりに期待します。



皆さまで協力で、こつり支援事業が順調に行われ、
現地インディオの人たちも喜んでいきます。